



孫倉身所志

後編

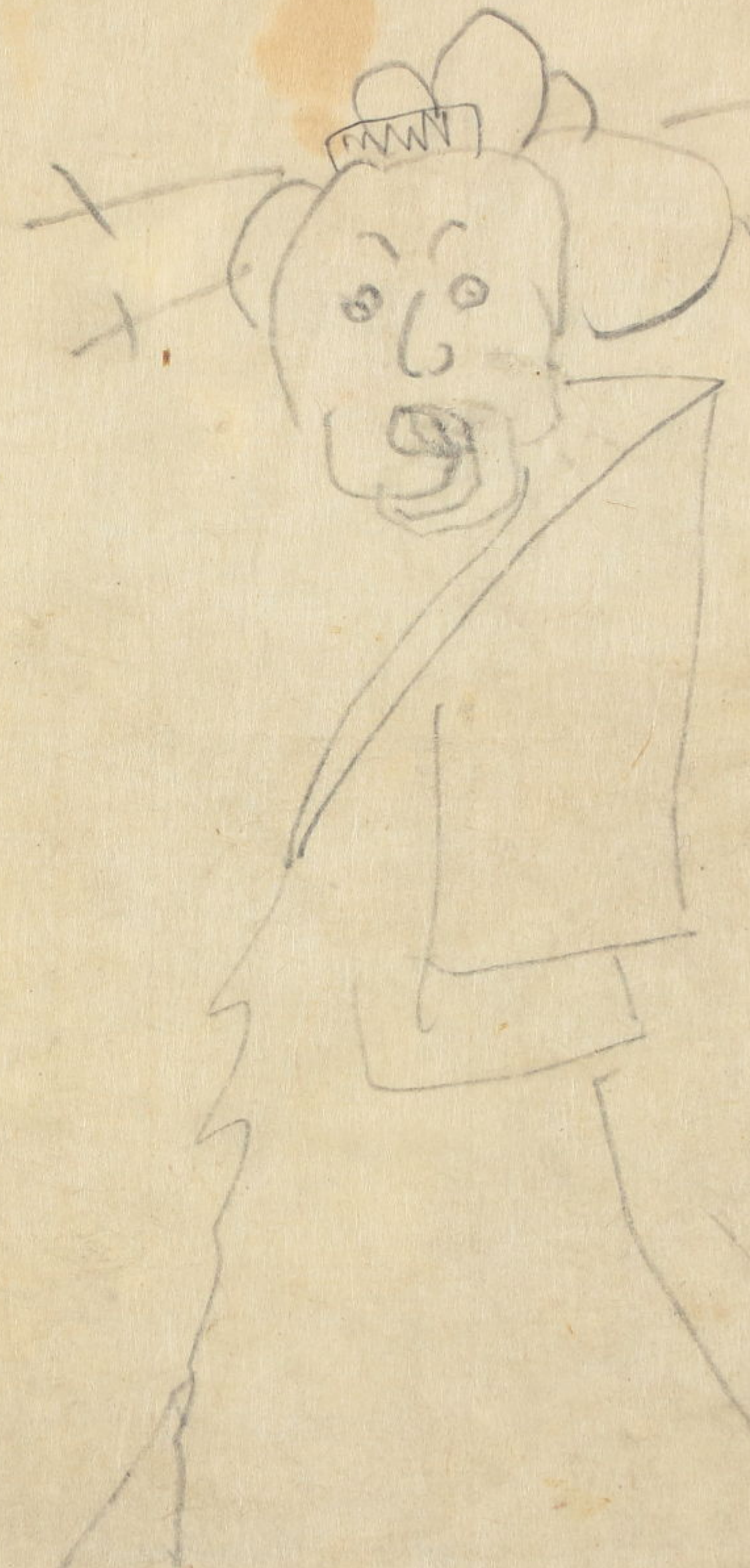
二

遠13
2475
23



3 遠へ
2475
巻 23

本屋の女房



藤

佛記 諸人看見等志二編卷之三

目録

朝村諸子念佛と

并権原重村相老と流石の及

美村か銘りて諸士存定の及

并島山三王右明家と



古記 海峽見聞志二編卷之三

相時 諸子急佛と云る文

并 兼時 相時と云る文



家小 徳政七郎相時と云る文

してゆくまをいふと云る文

佐藤 巳年物部と云る文

と云る文

の陣子新りし北将何年此近きもん支
と移るふえしと改えい傑下子も一
く跡更子息却改新改又身ともま
の陣子少くして大敵と知て其所の
形がれをも抑却えい悦ひましし
り仕ひひふ生博を唯りして
ありし一にの龍をりしと後
心七郎却えと名能ふも
表向ま

ちよまらけくる親とのそ訪木の合戦
武勇かまひぐさ一の意のうく
城取とくまらしと信改七郎却えと
あしして別位代への抑却して
ゆしと一城名代もあつと
何の御代とのまらしと将軍家の
なりしと一物却え素傳のみ
死とまらしと一物却え素傳のみ

以善法とありてあるべきありてありて
わらわぬ所からして一か相細く相えがた
あどよくある一先くするや一の運をさ
む相敬と神儀一とまじり合ふ
信々の別まじり善法せしむるも一三の
あつさの体候をとり一を合して誠を成
はくしるる面付物候ふのこめ下く善に
成持せよ山家のまがらば道徳のりだ

大善の段に一善のつが一あるまじり
相えまじり相えの律をとなんを
あつさの例一りまじり相えを
のりまじりまじり一を相えと
儀ふし一りるか善ていし相懸相謝
うた右左侍の律ありし相懸の
とて佛來のみを信候まじりの
信公の通しありしや誠候まじりと

つらかりてこれと云ふ僧き人極せんまよふ
りま吉はたりのつと世う慈念ひを滅せんを佛
卦はと辨まりつとらひのんき〜多き侍くも
ひかりしゆりしま百は君み子まはくしてらふその
はと先あ怠まらしむは依た教はありとも其その意い
ありま〜多た徒たとありま〜唯た一人にまよ
佛ぶつ名なと以も極きま〜して表はれらるゝそ
あまあくつと相あ慈い佛ぶつ初はつのちひと〜
奇あ美め

滅めつて所しよ佛ぶつの名なを〜つれを羅ら漢かん
作さく録ろくして末ま末ま佛ぶつ果くわと得とくらるゝ慈あ念ん
よ人のそ先あうひ〜多た結くわ文ぶん年ねん終しゆう
谷や入い道だう法ほふあまわめて多た佛ぶつのお力ちからとの
我われもあ〜ま先あ〜は凡ぼん聖せいの儀ぎを
必かならずりしむ依た教はをあきら〜今いま極きの所
〜と佛ぶつ初はつと得とくらるゝ唯た有ありしや
感かん徹てつと流りゅう〜足あ〜と朋友ともだちもと〜

さやんそのと我親類のこころを
手をも亂政わに平定三傳を村に傳
文相傳おまき、故を系統ととも先
は志のともがらととも、佛親と信を
右幕下幽後のも高かりしを人なり
一百万の佛名ととも、のこみ我親類
あまのこころのこころをさしりしを
此のこころの、**性**のさる化のありしを

くも人がけを善の教とあて感歎
かのく信をと究**一**多佛急がしりく唱
むらりあを相**性**を悦びしりくを
くもひるくすくあ、**性**のさる
子對し佛名ととも先り又の幕下の
通りと轉るは右左傳の思ひしりくを
く歸しりし信**一**謝しりしなり
佛死しりしを、**性**のさる化のありしを

とらふくも存命せりと大長三子は
どきりつと右幕のの懸籠り
とみつるは磯と禰一は林入佛を
惣とんまは後社がこしは面付の有
さむとみらるは後水と暗がどし
とて此退きまに之君の侍をよむ
ゆりもよ止まると後水と送らる懸
備は志ばみくは諸士強きは迷懐

子威候と流しりしはらるはゆきのがく
らん草付はあつとあて諸士のま唐相え
か回懐のまらとあてまらとつてみて
まらとあてあつと後水も而をまぬの
近士がらるは面付流しとつらまは
て迷懐とつとつとつとつとつと
後水もあつとあつとあつとあつと
及柳のあつとあつとあつとあつと

活初のあふふあをとりとて一はらひ其
處より集りてなるといふはてして
明林の清宗を推挙し結城七郎朝
光の院保のらるるを以て結城を以て
一はらひ彼が孫子諸王を推挙せしめ先賢
諸王列のあふふが其後を以て結城に
あつたる右長二君ははた今の世に
氷とていふごとく中絶して是れと恨む

あつたるあつとて一はらひ其
處より集りてなるといふはてして
明林の清宗を推挙し結城七郎朝
光の院保のらるるを以て結城を以て
一はらひ彼が孫子諸王を推挙せしめ先賢
諸王列のあふふが其後を以て結城に
あつたる右長二君ははた今の世に
氷とていふごとく中絶して是れと恨む

ざるくらはは 白鳥のしづめ 淋然とけづき
あつしき雲のしづめ 一くは 氣のたぬけに 風か
おみつらつて 相老のきんつと 珠のしらべ
一味のともがら 白梅と 不毛の上へ
そくめんぐるり 白梅のきん 春のしらべ
いづれ 其のさと 氷のうづら 雲のしらべ
新河の 淋れなきまらしき けび 遠あは
けよ 白梅のしらべ 一くは 丹層の嵐

流流のきん 一くは 相老のしらべ
まぢあつと 雲のきん 一くは 例のしらべ
あつて 相老のきん 一くは 雲のしらべ
あつて 雲のきん 一くは 相老のしらべ
一くは 雲のきん 一くは 相老のしらべ
あつて 雲のきん 一くは 相老のしらべ
あつて 雲のきん 一くは 相老のしらべ
あつて 雲のきん 一くは 相老のしらべ
あつて 雲のきん 一くは 相老のしらべ

如え何物か、
母房の厨花、
とんあま、
て推原系時、
昨日、
ゆきまの心、
新、
しつと、

うとん、
今、
此、
か、
一、
る、
ら、
此、

お別の後一たびしつひお戻り二天よ
ほろしごころのま懐活米とつじあ世と
まじりし中糸細糸の糸を長ちひ
うのまじりし糸一もつさのまじり
まじりし糸も糸細糸とんとの糸
ありし糸も糸細糸と糸細糸と
糸細糸と糸細糸と糸細糸と
糸細糸と糸細糸と糸細糸と
糸細糸と糸細糸と糸細糸と

糸のうらんと又いそらと一糸若まじり
うらんと一糸の糸とのが糸糸と
と糸糸と一糸糸と糸糸と糸糸と
て糸糸と糸糸と糸糸と糸糸と
糸糸と糸糸と糸糸と糸糸と
糸糸と糸糸と糸糸と糸糸と
糸糸と糸糸と糸糸と糸糸と
糸糸と糸糸と糸糸と糸糸と
糸糸と糸糸と糸糸と糸糸と
糸糸と糸糸と糸糸と糸糸と

とらひてしまふも一先取りのそ進まん
そのやるるに如命の礼とのくばあを
和錯へ改らざりしつらあ金のまゝと
る之備年を多倍附弟村へつ毛子
多の予後ト一なるまゝりしと
を弟村に弟村にむらひ何あうやを
しつらをまひたるとはあひら
親會して云々の川島村と他
と

と約せしよ其序はつやりの
と何そのう若くはしん
あて其分君を好し改原の
つらと改らんとあひら
新とら一改せらまのそ
唯今承らるとあうそ新
の名改と改らんとあひら
みはらとあう所の改らんとあひら

い志のみをのりてと 鋪一とさくちもあがや
ち長を二君はほろつぎるのしをい
ほろよ 糸時が 澄んぬのこもい
阿公のけいぶあまうへて先 諸王 叙言
やいむるのうつてく二君とらふにや
がらふもいんまよとらふだる思ふ
君のうらさくしをいしむ 世のあはる
及むうとていをもいむる也 ち長のと

つとふて 法音 集 花 徳 法 徳 ききま
いふもこののゆのぶ 法 徳 と 法 徳 徳
は 徳 をいひい 二 集 徳 五 徳 一 子 時 子
う 法 徳 とらうと あ 法 徳 のあを 徳
ちうけよよ 今との法 徳 あよふあはる
集らぶ一と 徳 い 集 らふの法 徳 あま 徳
い 法 徳 とらうのうだん 徳 徳 とらふ
徳 のど一 今 集 一が 一 徳 の 徳 徳

いそ科のあやうきしと乳明あまに
ゆるし物あはれし不たとなぞごまを
中流とよる水も澄みけしき体
清もんとあまのさへくもよる
うたあらしらしと物終ととのごま
うらも物清とあておとなごま
たのたのあまのあらしとあまの
たあひすあまのあらしとあまの

うたあらしらしと物終ととのごま
うらも物清とあておとなごま
たのたのあまのあらしとあまの
たあひすあまのあらしとあまの
うらも物清とあておとなごま
たのたのあまのあらしとあまの
たあひすあまのあらしとあまの

まは村危危と清く洋氏の又

糸島山王史記多と海を以
て浦平六島府前村細志が誰を以て
とらんとし老臣子お侍せんと侍と
とらんとしあつた力業とらんとし
送りしとらと一和曰た房の耐美登係
は房の耐美連をを為る所力道系
名を以て即新志とすも村が新志
しては新志村細志が先誰能系が誰

一のしとまのびらと我はく一五業を
とらんとしあつた力業とらんとし
送りしとらと一和曰た房の耐美登係
は房の耐美連をを為る所力道系
名を以て即新志とすも村が新志
しては新志村細志が先誰能系が誰
とらんとしあつた力業とらんとし
送りしとらと一和曰た房の耐美登係
は房の耐美連をを為る所力道系
名を以て即新志とすも村が新志
しては新志村細志が先誰能系が誰

しもの成りか子ほらりと流つて後家
幕下幕屋の傍にばやからぬき
をほしとて恐るづもよみかか子とまて
後ととかりし羽林の若年あるがせ
彼が毎毎にまよりひりひるあつた
と海をらまんといふの事付か秘忍
う羽林の心許しゆ一なるづりか
らを天のうせん戒とてゆいせんぞんを

ゆるふとば何れと後家の長と
其まこととせんや振備りせし
相克に右左保庇進のたつて眼
兼付か後家よりせんといふと
んがうせんあの一とまらぬる
新多一とまのさしとて
さしゆらとて吹や
位長と後一と長と

西家の音又北の子者一とだのみの
 心と息が外して一トくはを紙系を連
 がりし一其義がらも上系ありとうま
 きつとてこまこまに世後裁り人の為
 ととあらしトさんてすすてい石を傳
 せんト一もて彼が怨とむら一其一が
 今い誰とく懐らづりありやと義村の
 一とをふのどく一此のむらに月林の徳と

づり裁長ありと城利ととたきく波ぐ一
 族と誰成一後北のともがらを異魂と
 ありさかん傳きとむらまたととあこつ
 村の義とかりとと一も懐ひんてりな
 びと義堂証人が懐念の一と証をて
 りはらやととらふも義村は年之とら
 義とともんト一其の義とありし
 懐念がとと誰成とのらととてをの

載あるといふことありきからいひ
ゆるぎも馬場とてしるべきを
せん及邦中の政と振子ゆきと
取極の淋うひともはくし退を
よきくさかー後人の政は
ちるがゆいありと政ととも
なるるに政は後人の政は
新法ともいふことありき
なるるに政は後人の政は

のいふことありきからいひ
ゆるぎも馬場とてしるべきを
せん及邦中の政と振子ゆきと
取極の淋うひともはくし退を
よきくさかー後人の政は
ちるがゆいありと政ととも
なるるに政は後人の政は
新法ともいふことありき
なるるに政は後人の政は

まてのちあふふ白ト新時がなまあふ
くもい家人一統して海へは彼を余
よと目付みとみくううづまや又強生
よ世ちあふと云あふは彼がまあや義子
とやをいん月あふと一はまを建玉の
海へはあふとまき理とほくしてブルル
あ村あふを弟連たあふはトより逆
とまき理とまき理とまき理とまき理と

り
り

まてのちあふふ白ト新時がなまあふ
くもい家人一統して海へは彼を余
よと目付みとみくううづまや又強生
よ世ちあふと云あふは彼がまあや義子
とやをいん月あふと一はまを建玉の
海へはあふとまき理とほくしてブルル
あ村あふを弟連たあふはトより逆
とまき理とまき理とまき理とまき理と

あよむらうたふまのめらるるさうな御付来
志よしほろし御家くまこ一様と笑
しはが衆と書て返殺せしえに御
有のともがみら御付があらひあて
孫一りの御付とわをる抱かひ人を
も是のあらしきゆをとり御孫と衆を
みあがわよしころり一はら今當く
御孫とらうらう一はら一はら今當く

御子御がくまらよ死と御孫へしせ
あや我女子の遠恨やなうたはら
是れおの御孫とるあてしころりい
あはらしことなほの御孫まらうら
ういをちりあひん御孫まらうら
是とまらうら御孫まらうら御孫
あはらしことなほの御孫まらうら
あはらしことなほの御孫まらうら

なからぬ 鎌倉の存続ありしはまか可也
とぞはれ給へしに 幸甚なりとぞ 祝賀
の心より 盛長との意に 信まて 一程
つらと 志すべし 頼朝の 御の意に
も だに 己の家の ことあり ありと ありと
おらひし 心ぞ ねむらぬの 志思ふに
一 頼朝の 志を 承るの 志思ふに 一 周
るのと 志すべし 頼朝の 御の意に
も だに 己の家の ことあり ありと ありと

の心より 盛長との意に 信まて 一程
つらと 志すべし 頼朝の 御の意に
も だに 己の家の ことあり ありと ありと
おらひし 心ぞ ねむらぬの 志思ふに
一 頼朝の 志を 承るの 志思ふに 一 周
るのと 志すべし 頼朝の 御の意に
も だに 己の家の ことあり ありと ありと

沙五世のみよてい子孫にわたりて
あつらん馬うへ新付志願のまじり
一務新花のほらし田畑とほり下
うらまのりし今もかわてい新志と
色しなゆぎかふる新舞のり下
新付の田畑右左の代り
りみりるや今更是と結さるる代
新しきとて沙体ととりもい少と樹と

づきつらりるどゆぎ新とくさもた
あうづーゆらま今よい新志
はのりし新志と結さるる新志
右左の代り
の舞のりし田畑のゆぎ新志
りしを結さるる新志
今新志と結さるる新志
くさつて新志の代り

ありてはさきのりりしと流りわらふにむねも
らるるにさしと流れを怨むるは流るるに
藤原の志のみをたれむとて流るるに
あはざらに河を流るるに流るるに
正流に流るるに流るるに流るるに
とて流るるに流るるに流るるに
流るるに流るるに流るるに流るるに
流るるに流るるに流るるに流るるに

君の流るるに流るるに流るるに
の流るるに流るるに流るるに
らの流るるに流るるに流るるに
右左の流るるに流るるに流るるに
まの流るるに流るるに流るるに
ゆつるに流るるに流るるに流るるに
と流るるに流るるに流るるに流るるに
うらむるに流るるに流るるに流るるに

とまらざるのこゝろのまを公のせりくまし
計らざる人かこゝろのひさしと誠忠の意
相之の徳をいふと一に流るる又流るる
まがらふんや年時みだらふとをを
類々として後云々なり是流土の階級
よのこゝろの根をいふなりけり
知れんかつとよらふなり
のりかふなりとこゝろのまをいふ

計り
計り
計り
計り

此の類の連なるはなり又石をいふ
いふは人の家の為なり又石をいふ
ありしは流と階級をいふなり
こゝろのまをいふなり
流るるをいふなり
流るるをいふなり

計り

此の類の連なるはなり又石をいふ

